

## ユニゾンとは詰まらないか？

オケをやっているユニゾンが来ると「つまらない」と思いませんか？

確かに同じ音形を吹くので、プレイバックを聴いても自分の音とは思えません。しかし、それこそがユニゾンの効用でもあります。

ユニゾンが詰まらないのであれば、弦楽器の人は本当に詰まらない作業をしている事になります。果たしてそうでしょうか？

オケには「オケならではの音」があり、それはウィーンフィルやベルリンフィルの音として記憶されます。そこには大人数の作り出す豊かな音があるからです。

翻って管楽器の場合、ユニゾンは何となくつまらないと感じるのも確かです。それは普段からソロを吹く事が上手い奏者の証とされるからでしょうし、結果として自分の音を聴いてもらえるからでもあります。

あたかも弦楽器が作り出す舞台の上で演技をする役者の様です。これが管楽器の生きる道と言えそうですが、役者にはバイプレーヤーもいて、その名人上手もいます。これを2番奏者に見いだす事も出来ます。

しかし2番奏者とのユニゾンになった時はどうでしょう。音程もリズムも合わなければ、どちらも大根役者と思われれます。そしてオケでは案外そういう場面も多いのです。

モーツァルトのフィガロの結婚序曲の出だしは難しいものの一つです。それはPPに加えて、ファゴット2本とチェロのユニゾンで始まるからです。まあ不得手でした。大きく吹くと怒られるし、速くなって怒られるしリズムとタイミングが合わないし…。面白いのは、チェロの人も得意ではなく「ファゴットは上手く吹いてるなあ」と思っていたと。こちらは真逆に考えていたんですが(笑)

それはさて置き、本当に出来るだけ避けて通りたい曲でしたが、しょっちゅう演奏しました。そんなある時、芸大オケで吹いておられた大島條亮氏とやる機会がありました。これが驚くほどぴったり合ったのです。指揮が故・小松一彦氏でそれも良かったのですが、合った時の音が本当に良い事に感動すら覚えました。初めてユニゾンの面白さを知った思いでした。何故合ったか？その理由は。

それは音の長さに関係があります。フィガロはテンポが速いので、つい四分音符が短くなってしまいがちなのです。これに気を付ければタイミングも合い、先に行ってしまう事も防げます。ここには基本的な事をしっかりやらないといけない教訓があります。

閑話休題、ファゴット2本が出すPPは1本で出すPPとは全く違うという事なのです。モーツァルトの天才を感じました。ユニゾンは面白い。出来るだけ茫とした音で吹かないと大きな音に聴こえますので、そうした音色を出せる様に工夫します。そうすれば二人で吹いても邪魔な音になりません。まあ、それが至難の技なのですが(笑)

自我のある大人が完全に相手と同化するという事は、まあ不可能と言えるでしょう。如何にして二人の道筋を作るか？高校生くらいまでは、無理にでも自我を矯め、従わせる調教が有効かも知れません。ひと頃、テレビで所謂名門プラスバンドを取り上げた事がありました。それは、私の目には当に調教にしか見えませんでした。しかし吹奏楽コンクールには必要なのでしょう。

どうも端から考え方が違う様ですね。しかし、大人は無理。これはアンサンブルの基本ですが、まずは同じ趣向の人を集める事です。かつてベルリンフィルでザビーネ・マイヤー事件がありました。音楽監督のカラヤンが、クラリネットのポストにこの人を据えようと

しました。しかし、楽員の抵抗に遭い結局入る事はありませんでした。その時の楽員の意見は「彼女は上手いかも知れないが、我々の音とは違う」との事だったと記憶しています。マイヤーが女性だった事もあり、だから入れなかったとジェンダーの問題にすり替える論が多く見られたものです。酷いものはナチスオーケストラとまで貶しました。その後、時代は変わり女性奏者が増え、ベルリンフィルも様変わりしました。

でもどうでしょう。ベルリンフィルは確かに当時も今も上手いですが、ベルリンフィルの音があるのだろうか？と言う気がするのです。他の上手いオケと、ステイタスやブランド以外に違いはあるのでしょうか。私にはあるとは思えないのです。

話がずれた様に思うかも知れませんが、詰まるところ同じテイストの奏者を集める事がアンサンブルの、そしてユニゾンを楽しむ基本だと言っているのです。もちろん技術的な問題もありますが、それは当然なので、ここでは措きます。

それと大事なのは楽器です。世界中のファゴット吹きがヘッケルを求めるのは、アンサンブルがし易いからです。人と同様、楽器のテイストも大事です。何せリードと共に直接音を出すものですから。尤も同じヘッケル製でも個性があるので、それだけではありません。メーカーが違っても「音」に対する感覚が揃えば、合わせる事は出来ます。しかし、最初に出会った音で、その先は大きく変わります。ソロを吹けば誰よりも音楽的で、ユニゾンを吹けば一体化したアンサンブルを奏するのが理想でしょう。

アンサンブルは一人だけ上手い人がいても成り立たず、一人下手な人がいるだけでぶち壊しになったりします。個人プレーとチームプレーの理想的なバランスが良い演奏を生み出

す訳です。その理想の為に、ユニゾンの面白さ楽しさを経験する事が重要だと思うのです。